
裏切った

並木沙知子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏切った

【Zマーク】

N4869D

【作者名】

並木沙知子

【あらすじ】

咲喜、舞、詩織。そして美奈、日奈子、悠子、夕樹。中学校での、弱肉強食の世界。

第一話・子供は素直にして残酷なもの

舞つて一緒にいると楽しいんだけど、少しおざことじるもあるんだよね…。

だから少し一緒にいるのを避けてたんだ。

だって、疲れちゃうんだもの。

あのテンションについていくのも結構大変なんだから。

そんなとき、こんな話題になつたの。

「舞のことが嫌い？ 好き？」

普通とか、少し好きとか、そういう細かいことはなしで、とにかく嫌いか好きかとかしか答えられなかつた。少し前なら、すぐ「好き」って言つてた。でも、私はそういうのをためらつた。

そのころは一度少し前に喧嘩したのと、少しおざこと思つたのが重なつて、私は「嫌い」と答えた。

「子供は素直にして残酷なもの」

「え？ 咲喜も嫌いなんだ？」

不思議そつに聞く友達。

「今、喧嘩してたし… 実はちよつとうざいなあつて思つているのもあるんだよね…。」

「ふーん。」

そしてその会話は終わり、丁度教室に舞が戻ってきた。

「咲喜！」

嬉しそうに、楽しそうに私の方へ来る舞の姿が、懐かしいもののように感じた。

たぶん、さつきの会話で私の舞に対する友情が冷めてしまったのだろう。

「何？舞。」

そう言う私の声は、冷め切つていて。そして馴れ馴れしく舞を呼ぶ自分に、違和感を感じた。

そして私と舞を見るクラスメートの視線が、私に突き刺されるようだ。そんな視線を無視して、私は舞と話し続けた。

放課後、私は美奈たちと一緒に帰らないかと誘われた。

たまにはいいか、と思つて舞には「ごめんね、一緒に帰れなくなつちやつた」と言つた。

「なんで帰れないの？一緒に帰ろうよー。」

「私、美奈達と帰るから。」

「じゃあ、その中に私も入れてよー！」

「嫌。私、舞じゃなくて、美奈たちと帰りたいの。」

「私も居たつて変わらないでしょ？」

「でも、いいじゃん。明日は一緒に帰つてあげるから。」

「…どうして、入れてくれないの？」

「私は美奈たちと帰りたいの。たまには私が舞以外の人と帰つたつてかまわないでしょ。」

そしてうつむいた舞を放つておいて、私はその子たちと帰つた。

第一話・少し嫌気がさしたから

案の定、話すのは舞の悪口。

やつぱり、と思いながらも私も少し本音で話す。

「咲喜、あんたよく舞の親友なんかやってられるね‥。」

「けつこう楽しいのよ？あの子。」

「でも休み時間、舞のこと嫌いって咲喜言つてたよね？」

「このごろちよつとうるさいなって思い始めちゃつて‥。」

「確かにね‥。さつきだつて、口げんかになつてたし‥。」

悪口は、止まらない。

けど、私は止める気はない。

私だって、舞への不満は少しあつたのだから。

「少し、嫌気がさしたから」

「咲喜が舞を嫌つてるなんてね。」

「意外よねー。」

「でも、咲喜みたいな子でも嫌いってなると舞を好きな子なんているの？」

「まあ、いるんじゃない？どこかには。」

そんな会話が続いて、分かれ道になつた。

「ねえ、咲喜。」

「何？」

「メアド交換しない？」

「いいよ。」

美奈は申し訳なさそうに、「メモ帳、今もってないんだ…。」と言つた。

私は「大丈夫。私持つてるから」と言ひて、鞄からメモ帳とペンを出して自分のメアドを書いた。

「私も、いい？」

日奈子もそう言つので、私はメアドを書いてメモを渡す。

「じゃあね。」

「バイバイ。」

2人と別れ、そして、私は一人で家に帰る。
そして私は2人からのメールを待つた。

まず、美奈からメールが来た。

咲喜、メール届いた？美奈です。
メールが届いたら返信してね

そんな内容。

それと同じような内容のメールが、日奈子からも来た。

そして美奈からメールが来る。

「ねえ、次の標的は舞にしない？」

：返信に困つた。

美奈は、夕樹と悠子と日奈子と一緒にクラスの子をいじめている。
いじめはいろいろな方法で、でもかなり本人には効果的ないじめをする。

裏切り、集団無視、暴力、悪い噂を立てる。

みみつちいものから、かなり派手なものまで。
軍師である夕樹の考えに基づいて、いじめをする。

悠子の情報網で次のターゲットを決めて、悠子の情報を基に夕樹が

作戦を考える。

その作戦に必要な人数を集めたり、必要な人に呼びかけるのは日奈子で、作戦実行の合図や、現場での指示を美奈がやる。

4人そろえば最強…これが私の4人にに対する気持ちだった。

4人にかかれば、舞は不登校まで追いつめられるだろう。

芯の弱い舞はなおさら被害を受ける。

…自殺も、ありうるかもしない。

だから、一瞬ためらつた。

けど、私は帰りのことを思い出した。

友達が他の人と帰るというだけでもかなり反対したという舞のこと

を思い出して、イライラしてきた。

「いいね！」

そうメールを送る私の顔は、そのときかなり醜く見えただろう。

第三話・それを始めるとい、それはひじく簡単で樂しこもの

はじめは戸惑つた。

勢いに任せて返信したら、今日、実行というメールが来てしまった。

…どうしよう。

そう思いながらも、私は開始した作戦に沿つて動いていた。

…人間、がんばればなんとかなる。

そんなことをまさかいじめの作戦で学ぶなんて結構悲しい。

「それを始めると、それはひじく簡単で樂しこもの」

私の役目は、舞を裏切ること。
自信がないから不安だつたけれど、「咲喜ならできる」とこいつ言葉
に乗つてしまつた。

昔から、思つたことが顔に出やすいタイプだと想つていたからやる
直前にはかなり不安になつた。

でも…人間、やればできる。

実際、演じるのは簡単なことだつた。

いつもどおりの反応をする。舞を私の思うとおりに誘導する。
ただそれだけのことだと思えば、簡単だつた。

「咲喜、あんた上手いね。演技するの。」

「私たちとこんどからつるまない。」

ほめられるのはうれしい。

けど、これ以上人を裏切るのは「めんだつた。

「…でも、恨みもない子にやるのはいやだな…。」

「じゃあ、次の標的は…あなたを昔いじめた詩織。」

この名前を聞いて、私はもう他の人を裏切らないといつ心は揺らいだ。

橘 詩織。

私を昔いじめていたいじめっ子。

今はもういじめをやめたらしくて、眞面目でいい子の学級委員。

男女問わず人気で、八方美人な世渡り上手。

でも、私はこの子を憎んでいた。

舞よりも、ずっと…。

小学4年生の頃。

人見知りが激しくて友達のできなかつた私に唯一話しかけてくれた子。

それが、詩織。

詩織は優しくて、いろいろなことを教えてくれた。

花言葉や勉強とか、いろんな知識を与えてくれた。

そして私が完全に詩織を信じきった頃、いじめははじまつた。

最初の方は少し言つたことを無視されたり、小さな文房具がなくなる程度だつた。

でもそれはだんだんひどくなつて、最終的にはクラス全員が無視して、物は壊され、教科書とかも使い物にならなくされた。

そして最後まで味方だつた詩織が、最後にこう言つたのを思い出した。

「馬鹿ね、咲喜。」

「何が?」

「あんたへのいじめは、私が一番最初に提案したのに。それにも気づかないなんて愚かね。」

そう言って、おだまきの花を私に投げつけた。

私は、詩織にたくさんのお花言葉を教わったから知つてゐる。この花

の表す意味を。

この花の花言葉は、「愚か・のりま」。

詩織が言った言葉のとおりの花言葉。

私が詩織にたくさんのことを使わつた。

けど、最後に一番難しいことを学んだの。

それは、裏切り。

…それを思って出でた時に、私の心に恋みと悔しがりみ上げてきた。

「ねえ、やひひー。」

「…この…咲薙、わあわあでやつたくなーって言つたのに。」

「昔のことを思って出したら、やつたくなつてきりやつた。」

私は、笑う。

詩織に復讐してやひひと誓いながら。

第四話：人を裏切り自分は人を信じなくなる

詩織も、単純だった。

所詮、こんなものなのだ。

みんなは簡単にだまされてくれる。

笑顔になつて、本心を隠すだけなのに。

どうして、みんなは騙されるの？

わからない。

理解、不能。

「人を裏切り自分は人を信じなくなる」

人を裏切るようになつてから、人を見る目が変わつた。

前まで、純粹に人を信じていられたのに今はもう人を信じられない。
人と話せば、私を騙そうとしているようにしか受け取れなくて、
人といえば、私は安心することもできない。

美奈たちに対してもそれは同じ。

むしろあの4人はいじめのプロだったからいつ丞先が向くかわから
ない恐怖におびえていた。

舞は、相変わらず騙されている。

私はただ普通の自分を演じているだけなのに。

単純だな、と罵りたくなる。

でも、少しうらやましかった。

人を純粹に信じられることの幸せを私は失つて初めて知つたから。

昔は、それが当然と信じていた。

けれども、今は当然と思えるようなことができない。

詩織は、派手にいじめられている。

美奈たちからも実は恨みを買つていたらしい。

夕樹曰く、「八方美人でいい子ぶつてる子は嫌い」らしい。

私も確かにそういう子は嫌いだった。

でも今回ははじめの方はなかなか手出しできなかつたから日奈子が大活躍した。

日奈子は私、夕樹、美奈を紹介した。

そして詩織は、私のことを忘れていた。

私は、その事実を知るとほんの少しの容赦する気持ちは消えた。

だから遠慮なく自分の得意分野の行動をした。

そして私は、裏切りの必要がなくなつたとき、去り際に詩織へ花を贈つた。

その花は黄色いカーネーション。

「あなたなら、この花の意味はわかるよね。」

詩織は、驚いたような顔をした。

「まさか、あんたは私がいじめた…。」

「そうよ。私は、昔あなたがいじめた子。」

そして、私は夕樹に聞かれた。

「あの花言葉は？」

「軽蔑。」

その言葉を聞いて、夕樹は笑みを浮かべた。

「咲喜、最高。」

そう言って夕樹とハイタッチを交わした。

第五話・裏切りの女王への罰は

舞は、もう人間不信。
詩織も、人間不信。

私達の勝利。

でも、2人はただのいじめられっ子じゃなかった。
悔しかつた2人は、私をつぶそうとした。

「裏切りの女王への罰は」

「ねえ、詩織。」「
「なに? 舞。」「
「詩織は誰にいじめられたの?」「
「…咲喜と、美奈たち。」「
「私も。ねえ、私たちで復讐しましょうよ。」「
「…美奈たちにも?」「
「違う。あの入達を狙つたってどうせ私たちが返り討ちに遭うだけ。」「
「そうね。」「
「だから、咲喜だけを狙うの。」「
そう言って笑う舞の瞳には、憎悪がこもっている。
その憎悪に気づいた詩織は、笑つた。
「いいわね。…舞。昔ね、咲喜って私のいじめられっ子だったの。
でも、あの子は学年が変わつてからクラスが違つてしまつていじめ
をやめたの。」

「そりなんだ。」

「でも、あの子、生意氣だから懲らしめてあげましょ？」

「そうね。」

嬉しそうに舞と詩織は笑いあつた。

…さあ、復讐の始まりだ。

「…美奈。」

「何？ 悠子。」

「舞と詩織が、咲喜をいじめようとしてるわ。」

「…そり。」

美奈は、感情も無く相槌を打つ。

「助けるなら、今しかないって夕樹は言つてた。…どうする？」

「じゃあ、切り捨てるわ。」

何の感情も浮かべないで、そう答えた。

「あの子、裏切りのプロじゃない。…いいの？」

そして美奈は、口先だけの笑みを浮かべる。

「咲喜が裏切つてることをかなりの人が知つてるわ。だから、知られた段階でもう咲喜の役目はおわり。」

そして、美奈は笑つた。

「…裏切りの女王が裏切られて破滅するなんて、面白いじゃない。」

そう言つて美奈は、にぎやかな教室に入つていった。

「…咲喜。」

「何？」

「一緒に帰ろ！」

いじめは無くなり、昔と同じ日常に戻つた。

私は詩織からの復讐におびえていたけれど、3ヶ月も経つた今、私はそんな事を忘れていた。

舞とは前と同じような関係になつて、楽しい学校生活をすごしていった。

けど、状況は変わった。

「残念だつたわね。」

冷たい声でそう言い放つ舞。

舞の声ではあつたけれど、それは舞の声を真似して他人が言つたかのような違和感。

「どういうこと?」

「咲喜が私を裏切つたこと、私は気づいてたの。…まあ、咲喜の裏切りは巧妙だつたけど。」

「そして、私と舞は協力したの。」

気づけば背後に立つていた詩織。

「ひさしげりね。咲喜。ずいぶんといろいろやつてくれたじゃない。」

綺麗な笑顔で言い放つと、詩織は私を蹴り飛ばした。

「そのぶん、ちゃんとお礼してあげる。」

そう言つて詩織はあざみの花を私に投げた。

「…復讐…。」

呆然としながら、私はその花の意味を悟つた。

あの日々は何だつたの、なんて思いたくなるほど私は惨めな思いをたくさんした。

殴られ、蹴られ、死ねと毎日言られて。

誰も信じられなくなつたあの日、私は夕美に出会つた。

「大丈夫?」

心配そうにそう聞いてくれた夕美だけを、私は信じるよくなつた。

夕美だけは優しくしてくれた。

それに夕美は違う小学校の子だったし。
だから私も、夕美に優しくした。

夕美だけが心のようじじうだつたから。
そして、私がいつものように待ち合わせ場所に行くと…。

「あら、咲喜。」

見下したかのよしうな言い方。

「あんた、まだ私のこと信じてたんだ?」

軽蔑するかのよしうな言い方。

「みんな、でてきて良いよ。」

嬉しそうな声。

「これでもう気分は晴れたでしょ。」

そして出てきたのは夕樹と悠子、美奈、日奈子。
それに舞と詩織。

「どうして…。」

「夕美は、私のいとこよ。」

夕樹はそう言った。

確かに夕樹と夕美は似ていた。

「ねえ、あなたの得意分野で負けるのって悔しいでしょ?」

「…そう、ね。」

「咲喜…あなたは敗者。」

悲しそうな夕樹の言葉を合図に、私はまたしばらく人を信じられないくなつた。

裏切りの女王…そう呼ばれた私のへの、罰。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4869d/>

裏切った

2010年10月10日15時45分発行